

# 機能的等価を目指した精読指導

——英訳日本文学作品を教材に——

橘 高 眞一郎

〔抄 録〕

現在の日本の英語教育における読解指導ではテキストの大意を素早く把握するトップダウンの読解指導が主流である。グローバル化の著しい世界において迅速なコミュニケーションのための能力を養うことが重要な課題であることは疑いない。その反面、語句や構文の正確な理解や言外の意味、文化的背景などを考えながらテキストを読解するためのボトムアップの読解指導は等閑視されるようになった。ところが、トップダウンの読解指導だけでは不正確な読みの助長に繋がるため、ボトムアップの読解指導も見直されるようになってきた。英語教育の現場でこのトレンドの変化を象徴する出来事として、文学教材の再認識と英語授業への翻訳指導導入の試みがあげられる。本稿では英訳日本文学作品を教材に用いて機能的等価を目指す精読指導の試みを、英語教育学、翻訳研究、文体論、日英対照言語学の知見を交えながら論じる。

**キーワード** 機能的等価、構造解析、文体分析、英語翻訳、日英語対照

## 1. はじめに

最近、日本の英語教育に文学教材復活の兆しが見られるようになった。英語の授業で文学教材が用いられなくなった原因は、テキストを不自然な日本語に置き換えるだけの逐語訳 (word-for-word translation) による誤った文法訳読法 (grammar translation method) が批判を浴びたことと表面的なコミュニケーションのみを重視する偏った英語教育の蔓延によるが、この状態が続くことは決して好ましいことではない。今、筆者の手元にある代表的な文科省検定済高校英語教科書である『CROWN English Series I, II』(三省堂 2007) と『UNICORN ENGLISH COURSE I, II』(文英堂 2012) を調べてみると、文学作品の割合 (使用 lesson 数) は前者で「I」が25%、「II」が15%、後者で「I」が8%、「II」が0%で、全て課外や発展教材の扱いであった。正に文学教材が蔑ろにされている一端が垣間見える。

英語教育から文学教材が減少した結果、大まかに内容を把握するためのトップダウンの読解

指導のみが強調され、語句や言い回し、文章構成などから行間に潜む意味、心の動きなどを読み取りテキストの印象を意識的に捉えようとするボトムアップの読解指導が疎かにされるようになった。トップダウンとボトムアップは英語教育の両輪である。文学教材を用いたボトムアップの読解指導の大切さは今一度見直されるべきであろう。本稿では英訳日本文学作品を教材として用いた英語授業に文体教育と翻訳指導の観点を組み込むことで、構造解析、語彙の意味範囲や文化の異同（受容化と異質化）、文体分析（印象）などの多角的な精読指導をすることが可能になることを論じる。

## 2. 英語教育と文体分析

英語授業で文学教材を使用する場合、テキストを一読した後にまずテキストの文体分析する必要がある。それは文体分析をすることで、あるテキストから受けた印象 (appeal) がテキストのどのような言語的特徴から生じるのかを知ることが出来るからである。

文学作品が言葉によって成り立っている以上、読者の印象、想念などはすべてテキスト上の言葉に起因しています。もちろんある言葉が喚起するイメージは個人差もあるでしょう。しかし、われわれが名作を読んで同じように感動するとき、そのテキストが個々の読者に与える印象の中に何らかの共通項があるはずで、その共通項を言葉に即して調べるのが文体論です。  
(斎藤 1996: 55)

本来、文体分析は文学作品の意味を〈説明〉することはできない。そうするためには、文学の言語によってのみ〈表現〉されることを〈指示的〉なことばでいいなおそうとすることになる。文体論の目的とは、まさしく、この非〈指示的〉な意味が言語のどんな特性によって生み出されてくるのかを明らかにすることにほかならない。したがって、文体論は解釈を限定するのではなく解放する。それによって学生たちは証拠から自分の結論を引き出し、自分で感じとった意味をテキストの言語に照らせ合わせて実証する方法を探せるようになる。このようなことは教育的な見地からは望ましいことである。

(ウィドウソン 1989: 2)

文体分析の最初のステップは、テキストを散文（物語体、論文体、記述体）と詩文（詩歌、諺、格言、警句）に大別することである（cf. ナイダ他 1973: 172）。散文の物語体は出来事中心、記述体は一連の視点中心、論文体は論理中心が特徴であり、詩文は統一性、新奇性、構成の複雑さ、凝縮された表現、簡明な表現が特徴である（cf. ナイダ他 1973: 172-173）。この区別は一見簡単なようであるが、実際には散文と詩文が複雑に混じり合っていて判然としない場

合があるため、なるべく典型的な散文や詩文を教材に選ぶべきである。次に、散文にせよ詩文にせよ、その談話（文章）がどのようなタイプに属するのかを判別しなくてはならない。この判別も学生にとっては容易ではない。表1は Roman Jakobson(1960: 353-357) が指摘した言語の持つコミュニケーション要因 (communication factors)、言語機能 (language functions)、談話（文章）型 (discourse types) を筆者がブラネン他 (1988: 166-169) を基の一つにまとめたものだが、それによると文体分析の対象となる談話（文章）のタイプは、伝達内容（詩的機能）が論説調と物語調に二分されて、全部で7タイプあることがわかる。

表1

	コミュニケーション要因 communication factors	言語機能 language functions	談話型（文章型） discourse types
1	話者 addresser	感情表出的 emotive	自省調 reflective
2	文脈 context	指示的 referential	記述調 descriptive
3	伝達内容 message	詩的 poetic	論説調 expository 物語調 narrative
4	交際 contact	社交的 phatic	会話調 dialogue
5	記号 code	メタ言語的 metalingual	解釈調 exegetic
6	聴者 addressee	指令的 conative	勧告調 hortatory

(ブラネン他 1988: 167-169. を基に筆者が作成)

文体分析はまた「形式と語彙」、「効果的理解と特殊効果」という基準によっても行われる。「効果的理解」は規範 (norm)、「特殊効果」は逸脱 (deviation)・異化 (defamiliarization) と関連し、文学作品は「形式と語彙」が「特殊効果」(修辞・逸脱・異化) を持っている。(表2)

表2

	形式上の特徴	語彙上の特徴
効果的理解用	①理解度を高める形式上の特徴	③理解を容易にする語彙上の特徴
特殊効果用	②文章を飾る効果的な形式上の特徴	④特別な効果を出す語彙上の特徴

(ナイダ他 1973: 189. を基に筆者が作成)

以上を基に文体分析のポイント（作品、文章、目的、印象、言語）をまとめたものが次の図1である。

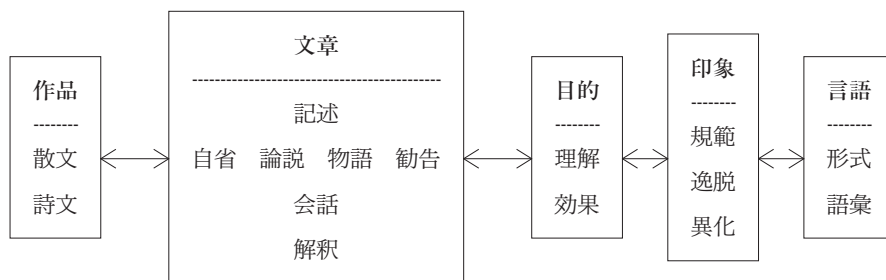


図1 文体分析の5つのポイント

これら5つのポイントの中心となるものは印象である。テキストの規範と逸脱・異化の割合がテキストから受ける印象を大きく左右するからである。従って文体分析の出発点は規範的印象あるいは逸脱的・異化的印象を「形式と語彙」の観点から言語学的に分析することになる（例えば交錯配列や倒置は形式上の逸脱、選択制限違反や共起制限違反は語彙上の逸脱である）。

### 3. 英語教育と翻訳研究

翻訳研究 (translation studies) では原文の形式を優先する考え（形式的等価）と原文の与える印象を優先する考え（機能的等価 or 動的等価）の考え方があがるが、現在では意味は形式や文体に優先するという機能的等価が主流で、Eugene A. Nida はその主唱者である。誤解してはいけないのは形式的等価よりも機能的等価が優先するという事であって、形式や文体を無視してよいということではない（詩文などは形式や文体自体が意味を持っている）。Nida の理論で英語教育に有用なものは、複雑な原文を核文 (kernel sentence) に解析する構造解析（逆行変形）である。複雑な原文を核文に構造解析した後に再構成させて訳文を作らせ、更に原文の目的 (skopos) を考慮して訳文全体の文体調整するという過程を組み込むことによって、語句解釈に終始していた英語学習を原文読者と訳文読者が等価の印象を得るという目的を意識した文体教育へと高めることが可能になる。また英語教育に翻訳指導を組み込むことは原文を正確に理解するだけでなく、異文化理解や発信型コミュニケーション能力養成にも有益である。

[翻訳は] 原文の語句や文構造を的確に理解した上で、目標言語でわかりやすく読者に伝えることを目的とします。一つの言語を単純に異なる言語に置き換えるのではなく、起点文化と目標文化の違いなど言語を超えた「言語外の意味」も翻訳に取り込んで訳文に再生する、異文化コミュニケーションの作業です。（鳥飼 2013: 102）

日本では、2012年の日本学術会議による参照基準<sup>(1)</sup>で、「通訳・翻訳」を取り上げています。「訳す」という行為は、「起点言語のテキストを理解し、解釈し、それを目標言語で表現することであり、世界の多様性を認識する手だてとなり得る」ことから「翻訳通訳を学ぶことに、根源的な意味がある」と明言し、外国語から日本語への機械的な逐語訳に終始することがないように指導方法を工夫する必要性を指摘しながらも、通訳や翻訳を導入することで、「異なる言語が内包する文化的特徴や差異への気づき」を与え、「日本語から外国語への訳出を試みることで、発信型コミュニケーション能力を育成することが可能である」としています。

近年、文法訳読は効果のないものとされていますが、正確に理解するために文法の知識は必要であり、理解した内容を母語で再表現する活動は、表面的な意味把握から、より深

い意味の解釈にいたるための「言葉への意識」や「異文化への気づき」を育成する一助となります。言語の学習における「訳す作業」の意義は再認識されていいでしょう。

(鳥飼 2013: 103)

翻訳研究の重要概念である機能的等価は翻訳の目的が翻訳方法を決定するという理論で、スコポス理論 (skopos theory) 又は機能的アプローチ (functional approach) とも呼ばれる。(引用文の ST は source text : 起点テキスト、TT は target text : 目標テキスト。)

Skopos theory focuses above all on the purpose of the translation, which determines the translation methods and strategies that are to be employed in order to produce a functionally adequate result. This result is the TT, which Vermeer calls the *translatum*. Therefore, in skopos theory, knowing why an ST is to be translated and what the function of the TT will be are crucial for the translator. (Munday 2001: 79)

スコポス理論は一貫性規則と忠実性規則という2つの「スコポス規則」から成り立っている。

The **coherence rule** states that the TT ‘must be interpretable as coherent with the TT receiver’s situation’. In other words, the TT must be translated in such a way that it is coherent for the TT receiver, given their circumstances and knowledge.

The **fidelity rule** merely states that there must be coherence between *translatum* and the ST [...]. (太字は原文のまま) (Munday 2001: 79)

従ってスコポス理論では、同じテキストが目的に応じてさまざまな形で翻訳可能になる。

An important advantage of skopos theory is that it allows the possibility of the same text being translated in different ways according to the purpose of the TT and the commission which is given to the translator. (Munday 2001: 80)

最近の翻訳理論では、翻訳文学作品は訳文読者独自の解釈による、もはや原文を離れた創作作品と位置づけられるようになった。翻訳は原文を訳文に置き換える受動的な単純作業ではなく、訳文読者が能動的に参加する創造活動と認識されている。<sup>(2)</sup>

[...] translation is not a matter of trying (and of course failing) to achieve sameness with the source text. The meaning and character of the source text are not simply

there for the taking: they have to be conjured up, co-created by you as you read. If you then go on to translate, you make a new text, out of different materials, in a different context. You want it to stand in for the source text insofar as that is possible in the changed circumstances: to do a similar job or have a similar effect. But whatever you have written is then of course put into the hands of readers who will interpret it in its turn, each in their own way. (Raynolds 2016: 107-108)

It is becoming clearer than ever before that translation is not subversive to the original but embodies the diversity of the literary text. (Sato 2013: 25)

#### 4. 文体教育と翻訳指導を組み込んだ精読指導

英文の正確な理解のためには文構造を正しく把握することが必須である。ここでは E. A. ナイダ (1973) が提唱した核文 (kernel sentence)<sup>(3)</sup>による構造解析と N. S. Brannen (1977: 130-131) の詳細な指導手順を基に筆者が独自に作成した指導手順を示すが、その前に構造解析に非常に重要な非定形節 (nonfinite clause: NFC) についての説明しておく。<sup>(4)</sup>

##### 4.1 非定形節と読解指導

最近、英語教育において非定形節の理解の重要性が指摘されている。節 (clause) という用語が普通に指すものは定形節 (finite clause: FC) である。定形節は定形動詞を持つが、非定形節は非定形動詞 (定形でない動詞) を持つ。更に非定形動詞すらない小節 (small clause: SC) も非定形節に含まれる。また非定形節は埋め込み文 (embedded sentence) としてしか現れない。

A finite verb is a verb that carries tense, while a nonfinite verb is tenseless. We now extend this terminology to apply to clauses. We can thus speak of finite clauses and nonfinite clauses. Finite clauses are clauses that contain a finite (tensed) verb, whereas nonfinite clauses do not contain a finite verb. Main clauses are always finite, though they may of course contain nonfinite subordinate clauses (as well as finite clauses). (Aarts 2013<sup>4</sup>: 55)

中村 (2009: 21-22) のように、非定形節を不定詞節、動名詞節、分詞節と呼ぶこともある。

これまで見た埋め込み文はすべて、that 節のように、動詞が三人称単数の -s や過去形の -ed が付く形をした時制を持つ文でした。ところが、節にはこのような時制を表面上表さ



ない節もあります。例えば、不定詞節では動詞は「to+動詞の原形」によって、動名詞節では「動詞+ing」(動名詞)によって、分詞節(分詞構文)では動詞は「動詞+ing」によって、それぞれ表されます。つまり、埋め込み節は、that節のような時制を持つ節と、不定詞節、動名詞節、分詞節のような時制を持たない節の二つに分けられます。そして、時制を持つ文は必ず表面上の主語を持ちます。一方、時制を持たない三つの節は、表面上の主語を持つ場合と持たない場合があるという共通点があります。(太字は原文のまま)

非定形節の中でも動詞的要素が全くないものは小節あるいは無動詞節(verbless clause)と呼ばれる。安藤(2005: 11)は小節を「主語・述語関係はあるが、動詞を持たない節」と定義して、以下の例をあげている。(以下の引用で、角括弧、斜体字、太字は原文のまま。和訳と出典は筆者が削除。)

- (24) a. I consider [*John intelligent*].  
 b. I believe [*Mary sincere*].
- (25) a. They want [*Bill out of team*].  
 b. I like [*my coffee strong*].
- (26) I found [*him gone*].
- (27) They named [*the child Richard*].
- (28) I feel lonely **with** [*my wife away*].
- (29) I sat **with** [*the door open*].
- (30) The winter was very severe, **with** [*deep snow on the ground*].
- (31) He was born **with** [*silver spoon in his mouth*].
- (32) He passed the examination **with** [*colors flying*].
- (33) He stood **with** [*his pipe in his mouth*]/**with** [*pipe in mouth*].
- (34) a. Rodney came out of the house, *his pipe in his mouth*.  
 b. Olsen, pipe in mouth, is leaning against the railing.
- (35) Jeremy stood, *his legs apart*, looking down upon his dog. (安藤 2005: 11-12)

Aartsは小節の2つのタイプを指摘しているが、一般的に小節と呼ばれているものは、安藤(2005)の例からもわかるように‘consider-class’(consider [SC]が典型の類)で、例えば‘We appoint her professor of logic.’(Aarts 1992: 55)のような‘appoint-class’(appoint [SC]が典型の類)の小節は少ない。この例文がSV[sc NP XP]ではなくSVNP<sub>i</sub>[sc PRO<sub>i</sub> XP]であるのは、「彼女を指名する」ことはできても「彼女が教授である」事態そのものを指名できないためである。構造解析の指導の便宜上、本稿ではより単純な‘consider-class’を主に扱うことにする。

From what has been said so far the following picture emerges:  $[V NP XP]$  constructions containing a predicative  $[NP XP]$  string can belong to either of two classes, namely those given in (197) and (198) below:

- (197)  $[VP V [SC NP XP]]$  consider-class  
 (198)  $[VP [VP V NP_i] [SC PRO_i XP]]$  appoint-class (Aarts 1992: 66-67)

以上に見てきたように不定詞、動名詞、分詞、小節を非定形節として捉えることは英文の構造解析をするうえで極めて有効であるが、日本の英語教育では、そのことについて十分認識していない現状がある。しかし、最近になって英語教育研究者の一部から、英語教育における非定形節の指導の重要性が指摘され始めてきた。

まずは、今後の中学校学習指導要領ならびに『解説』において、節には定形節と非定形節の二種類があるという点を明記し、言語材料の一部として正式に取り入れるべきと考えられる。  
 (谷 2015: 129)

次の(37)のような頻出表現における to 不定詞も、従来は分類不可能で例外的扱いを受けてきたが、(38)のような定形節との対比をとおせば、いずれも名詞節としての to 不定詞であることが理解されるであろう。

(筆者注：例文中の  $c_1$  は clause、 $\emptyset$  は潜在的な主語を表す。)

- (37) a. He seems  $[c_1 \emptyset$  to be ill].  
 b. I'm pleased  $[c_1 \emptyset$  to be here today].  
 c. He will be happy  $[c_1$  for them to help you].  
 (38) a. It seems  $[c_1$  that he is ill].  
 b. I'm pleased  $[c_1$  that I can be here today].  
 c. He will be happy  $[c_1$  that they will help you]. (谷 2015: 129)

現在、日本の英語教育において等閑視されている非定形節の指導は、今後の英文読解力養成指導に欠かせない要素になると考えられるが、翻訳の際に非定形節を意識した構造解析を行うことはその事に大いに貢献できる。<sup>(5)</sup>

#### 4.2 構造解析の手順

- (1) 長い文を核文に解析し、周辺的な語句 (peripheral matter) は削除。  
 ・チャンク毎にスラッシュで区切り、チャンク毎に文法、構文、語句を調べる。



- ・原文を核文に戻す。核文とは「基底構造→変形操作→表面構造」(順行変形)の操作を逆にした「表面構造→変形操作→基底構造」(逆行変形)の操作の結果得られる文である。どの言語であれその数は極めて限られるとされ、翻訳を行う上で極めて実用的な概念である。以下の例文で、(N)はナイダ(1973: 56)、(B)はBrannen(1997: 127-128)の例文を示す。
1. SV: John ran quickly. (N) Dogs bark. (B) (注) quickly は単なる M=Modifier.
  2. SVA: John is in the house. (N) Taro is upstairs. (B) (注) A=Adverbial (locative).
  3. SVC: John is sick. John is a boy. John is my father. (N) Taro looks strong. Taro looks well. Taro became strong. (B) (注) V の性質が異なる。  
The flowers are pretty. Dolphins are mammals. (B) (注) C の性質が異なる。
  4. SVO: John hit Bill. (N) Japanese eat rice. (B) (注) 核文数を最小に抑えるためにナイダやBrannenは除外しているが、筆者の構造解析の経験から、十分な情報量を得るためにはSVOA (e.g. I put a book on the desk.) も必要と考えられる。
  5. SVOO: John gave Bill a ball. (N) Mother gave me money. (B)
  6. SVX: X=[OC]→[SP]=[SV], [SVA], [SVC], [SVO] (注) 第5文型SVOCはSVX (X=非定形節)に解析する。非定形節は分詞節、不定詞節、動名詞節、小節の核文解析時に有用で、名詞節(主語、目的語、補語)、形容詞節、副詞節として機能する。
    - ・形容詞節(関係節)や副詞節は核文に解析。
    - ・受動態は能動態に、命令文は平叙文に変換して核文に解析。
    - ・分詞節、動名詞節、不定詞節、付帯状況は核文に解析。
    - ・所有格構文は核文に解析。所有格→主格 / 目的格。(注) his service → he serves X, his destruction → X destroys him. a man of confidence → the man has confidence.
    - ・抽象名詞は核文に解析→[(Xが) ~する] こと。
    - ・慣用句、句動詞などはわかり易く書き換え、省略された語句は補充。不可算(ゼロ冠詞)は概念・物質を、可算(a, -s付き)は具体物・具体的事例を表すことを意識させる。
    - ・助動詞と動詞(+前置詞)及び動詞相当語句はハイフンで繋ぎ、まとまりを意識させる。
    - ・接続詞や非制限的関係詞、分詞構文や付帯状況 with句に「+」をつける。
- (3) 核文を再構成する。
    - ・適切な接続詞を補い、原文の意味を変えない範囲で核文を並べ替える。
  - (4) 文法的に必要な語は補い、いったん削除した周辺の語句を加える。
  - (5) 自然な訳文にするために動詞の時制、語彙のレベル、接続の仕方の調整をする。
    - ・文法的・語彙的結束性 (cohesion)、論理的一貫性 (coherence)・整合性 (consistency)

を考える。

(7) 再構成した文章の全体的な文体を調整する（形式や文体にも意味がある）。

- ・原文全体の文体の印象を損なわない文体（忠実性）、訳文読者に新しい印象を与える文体（異質化）、訳文読者が受け入れやすい文体（受容化）を考える。

### 4.3 文体分析の手順

すでに述べたように文体分析の中心的観点は談話（文章）の印象である。読後の印象の原因となったものが何かを知るために、テキストが持つ形式や語彙の特徴をじっくりと観察すると同時にスコpos理論の観点からどのような成果があがっているのかを検討する必要がある。図2は文体分析の指導手順のフローチャートである。

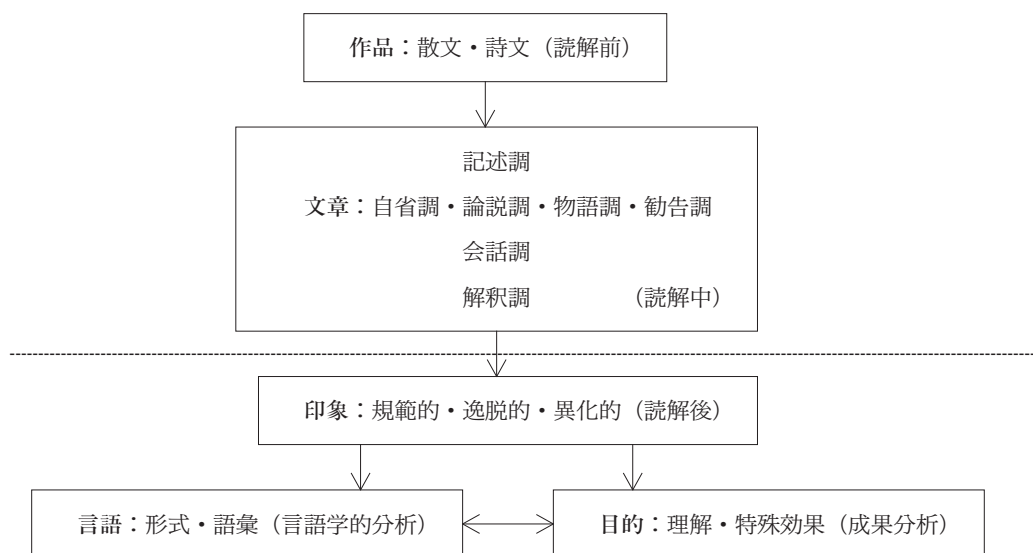


図2 文体分析の指導手順

### 4.4 精読の指導手順

英訳日本文学作品を教材に使用した授業手順は以下のとおりである（図3はそのフローチャート）。英訳日本文学作品を使用する理由は、①文化的背景が既知である ②比較的簡単な構文で書かれている ③日本語の慣用語や日常よく使う表現がどのように英訳されているか興味深い ④日本語母語話者として英訳の誤訳を指摘できる、などの利点による。

1. 3～4人1組のグループを作り、英語翻訳を配布。スラッシュ入れをさせ点検。
2. 各グループで相談しながら核文解析。難解な語句は英英辞典を用いて書き換える。
3. 各グループ毎に核文解析の結果発表。適宜、教員による訂正と解説。
4. 各グループ毎に核文を再構成し周辺の語句を加えて直訳作成。任意の1グループによる発表。適宜、教員による訂正と解説。

5. 各グループ毎に文体調整を行い発表。日本語原文を配布し比較。教員のコメント。
6. 英語翻訳と日本語原文の比較。教員による質問と解説。感情移入して英語翻訳の音読。
7. 復文練習。各グループで相談しながら、文体調整済みの和文訳を英語に復元。どのような部分が上手く復元できなかったかを考え、各グループ毎に報告。教員によるコメント。
8. 英語翻訳同士の比較をすることで、形式、語彙、文体（印象）の違いを観察。

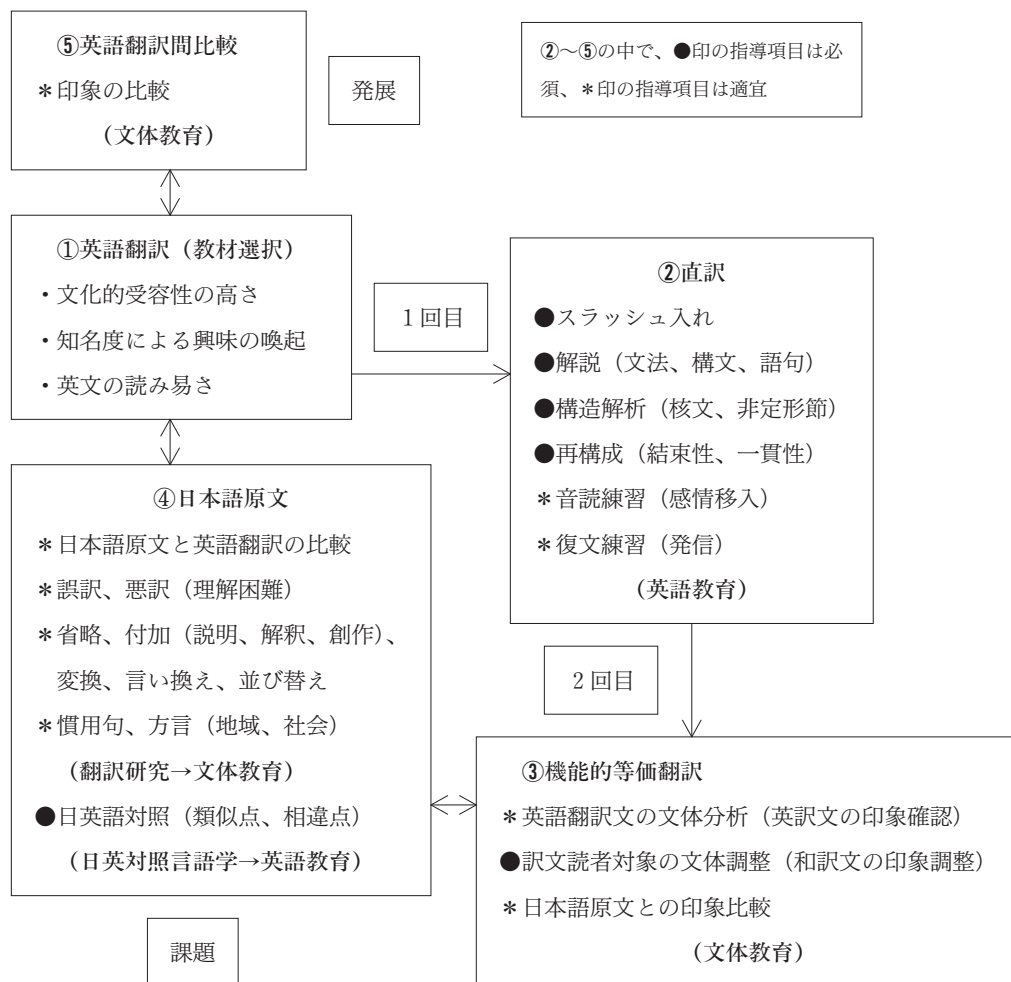


図3 翻訳練習を取り入れた精読指導

## 5. 実践事例

最初に学生によく知られており人気もある村上春樹の作品の英語翻訳 (Murakami, H. 1993. *The Elephant Vanishes*. Tr. Alfred Birnbaum and Jay Rubin.) を取り上げた。精読指導という性質上大量の文章を一度に扱うわけではないので、ある程度内容のまとまった面白そうな部分を抜粋して使用した。1人の作家につき2回の授業を割り当て、多くの作家の色々な英語翻

訳を分析出来るようにした。同じ作家の英語翻訳ばかり扱っていると学生に多様な英語翻訳の文体（形式・語彙の持つ規範・逸脱・異化）に触れさせることが出来ないからである。

①英語翻訳（番号とスラッシュは筆者） 黙読→スラッシュ入れ。

01. The elephant age had led to/ its adoption by our town a year earlier. 02. When financial problems caused/ the little private zoo on the edge of town to close its doors, 03. a wildlife dealer found places for the other animals in zoos throughout the country. 04. But all the zoos had plenty of elephants, apparently,/ 05. and not one of them was willing to take in a feeble old thing/ 06. that looked/ 07. as if it might die of a heart attack at any moment. 08. And so, after his companions were gone,/ 09. the elephant stayed alone in the decaying zoo for nearly four months with nothing to do/ 10. — not that it had had anything to do before.

②直訳→語句解説、核文抽出、核文訳、構造解析、再構成。

[核文抽出] 周辺の要素は角括弧で括る（→は周辺の要素を戻した直訳）。

01. The elephant age had-led-to X →象の年齢が X につながっていた

X = its adoption by our town a year earlier.

→ our town adopted the elephant [a year earlier].

→私たちの町が一年前にその象を引き取った

02. [When] + financial problems caused X

→財政問題が X を引き起こした+時に

X = (NP) the little private zoo on the edge of town (XP) to close its doors,

→ the [little private] zoo [on the edge of our town] closed its doors

→町はずれの小さな私立動物園が閉園した

03. a [wildlife] dealer found places [for the other animals]

→野生動物の取引仲介業者は他の動物のための場所を見つけた

[in zoos throughout the country]. →国中の動物園に

04. [But] + all the zoos had [plenty of] elephants,[ apparently,]

→しかし+全ての動物園はすでにたくさんの象を持っていた、らしく、

05. [and] + not one of them was-willing- to- take- in a [feeble old] thing

→ none would-not-like- to- take- in a [feeble old] thing → none did-not-accept it

→それで+その一つとして進んでその弱々しく年老いた奴を受け入れようとはしなかった

06. + that looked X → the elephant looked X.

X = [as if] + it might-die [of a heart attack at any moment].

→まるで+いつ何時、心臓麻痺で死ぬかも知れない+ように

07. [And + so,] →そして+そういうわけで、

[after] + his companions were-gone,

→象の仲間たちがいなくなった+あと、

08. the elephant stayed [alone] in the [decaying] zoo

→その象だけが荒れ果てていく動物園に残っていた

[for nearly four months] →ほとんど四か月の間

with + nothing to do → with + X

X = (XP) PRO (NP) nothing to do → the elephant had nothing [to do]

→象は何もすることがなかった+状態で

09. - [not that] + it had had anything [to do before].

→一もっとも+それ以前からやることはなかったけれど

[核文訳] 全体の内容確認のために核文を合成しただけの訳。Xは角括弧で示した。

「私たちの町がその象を引き取った。財政問題が[動物園が閉園した]を引き起こした。野生動物の取引仲業者は場所を見つけた。全ての動物園は象を持っていた。どれもそれを受け入れなかった。それは[死ぬかも知れない]に見えた。その仲間はいなくなった。その象が動物園に残っていた。象は何もすることがなかった。やることはなかった。」

[直訳] 形式的等価優先→核文をもとに周辺の要素を加え再構成。

「象の年齢が私たちの町が一年前にその象を引き取ることに繋がっていた。財政問題が町はずれの小さな私立動物園が閉園することを引き起こした時に、野生動物の取引仲業者は他の動物のための場所を国中の動物園で見つけた。しかし、全ての動物園はすでにたくさんの象を持っていたらしく、それでその一つとして進んで、まるでいつ何時、心臓麻痺で死ぬかも知れないように見える弱々しく年老いた奴を受け入れようとはしなかった。そういうわけで、象の仲間たちがいなくなった後、ほとんど四か月の間、何もすることがなく、象だけが荒れ果てていく動物園に残っていた—もっともそれ以前からやることはなかったけれど。」

③機能的等価翻訳 英語翻訳の文体分析→訳文読者対象の文体調整→日本語原文との比較。

[英語翻訳の文体分析] 英訳文の印象確認。(括弧内は語数。下線部は核文にする埋め込み文。)

The elephant age had led to its adoption by our town a year earlier. (14)

When financial problems caused the little private zoo on the edge of town to close its doors, a wildlife dealer found places for the other animals in zoos throughout the country. (31)

But all the zoos had plenty of elephants, apparently, and not one of them was willing to take in a feeble old thing that looked as if it might die of a heart attack at any moment.

(37)

And so, after his companions were gone, the elephant stayed alone in the decaying zoo for nearly four months with nothing to do — not that it had had anything to do before. (32)  
以下はこの英訳文の文体分析を行った結果である。

[作品] 散文

[文章（談話）] 物語調

[印象] 都会の郊外に住む平凡なややくたびれた男性の語り。

・親しい者に遠い過去の出来事をゆっくりと記憶を確かめながら気取らず率直に象に対する思い入れを語っている。ドライだが、少しウェットな感じもする。都会人の雰囲気がある。

[言語] 規範的な（標準的な）言語使用。

・語数：14, 31, 37, 32（比較的短文で構成）。 ・文数4：単文1、複文2、重複文1（比較的平易な構造）。 ・核文構造4 ・主観的表現2：法副詞1、仮定法1。 ・過去完了で始まる段落→遠い過去の出来事。 ・同じ語（elephant）を3回反復（逸脱）。 ・a feeble old thing（弱々しく年取った奴）という感情表現。 ・大部分、日常的で平易な語彙。 ・凝った比喩表現は皆無で、読者の理解を優先している。

[目的] 理解のしやすさ優先→平凡な一般読者を想定

・長く複雑な構造の文（所有格構文や非定形節の圧縮構造による入り組んだ従属関係→回想に要した時間の長さ、ゆっくりしたペースの話し方 ・主観的表現の多さ→対象への強い関心 ・同じ語の執拗な反復や親愛を表す感情表現→対象への愛着 ・日常的語彙と平明な表現→親しいものに向けた寛いだ対話。

[文体調整] 機能的等価優先（英文訳の印象を出来るだけ損なわずに、訳文読者が受容しやすい和訳文に調整）→ドライな都会人が受容しやすくする。日本語として自然に受容されるように、省略、付加（説明、解釈、創作）、言い換え、並べ替えを行い、感情の助詞、擬態語、方言を使用。本稿ではドライで気さくな感じを出すため、意図的に関東方言を使用した。<sup>(6)</sup>

「一年前、僕らの町でその象を引き取ったのは、象のトシのせいさ。財政問題で町はずれの小さな私立動物園が閉園することになって、動物取引仲業者たちが手配して、国中の動物園に動物たちを移してくれたんだけど、どこの動物園も象だけはたくさんいたらしくてね。どれ一つとして、あのヨレヨレのヨボヨボを引き受けようとはしてくれなかったのさ。だって、いつコロリといくかも知れたもんじゃなかったからね。それで、動物園の仲間たちがいなくなっても、ほぼ四か月間、あの象だけが荒れ果てていく動物園にポツンと残っていた一だからって、前からやることはなかったけどね。」（文体調整をした和訳文）

#### ④日本語原文

[原文との比較] 直訳又は機能的等価翻訳との比較、英語翻訳との比較。

「象が町（つまり僕の住んでいる町だ）にひきとられることになったのも、その老齢のため



だった。町の郊外にあった小さな動物園が経営難を理由に閉鎖されたとき、動物たちは動物取引仲業者の手をとって全国の動物園にひきとられていったのだが、その象だけは年をとりすぎているために、引き受け手をみつけることができなかった。どこの動物園も既に十分だけの数の象を所有していたし、今にも心臓発作を起こして死んでしまいそうなよぼよぼの象をひきとるような物好きで余裕のある動物園なんてひとつもなかったのだ。そんなわけで、その象は仲間の動物たちがみんな一匹残らず姿を消してしまった廃墟の如き動物園に、何をするともなく——といってももともととくに何かをしていたというわけではないのだけれど——三ヵ月か四ヵ月のあいだたった一人で居残りつづけていた。」 (日本語原文)

[教員コメント] (日本語原文の文体分析)

・ハードボイルド文体 (簡潔で力強く象徴的で、余白に語らせる Less is more の文体) とは違うが、中年男性が淡々と語る印象を与えるような文体。 ・文字種に平仮名が多く使われ、句読点も少なく文がやや長めになっており、視覚的にも音調的にも、滑らかだがゆっくりと落ち着いた雰囲気が感じられる。

日本語原文の文体分析では書記上のパラ言語 (paralanguage) である文字種 (漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字) にも注意する必要がある。宗宮 (2012) によれば、漢字は客観的概念、ひらがなは共感、カタカナは距離感・異質性を出すために使用される傾向がある。なお宗宮は触れていないが、ローマ字は主として外国人の科白など表記にみられるように心理的距離感や異質性を強調する飾り効果を出すのに用いられている。<sup>(7)</sup>

ひらがなは書き手の共感を押しつける。特に、常用漢字が存在する時にあえてひらがなで表すことは有標である。「心」と書く代わりに「こころ」と綴る、あるいは「秘密」の代わりに「ひみつ」と書くと、書き手の思い入れが伝わる。その結果として書き手に焦点が当たり、時としてうとうとし。普通に漢字で「心」、「秘密」と書けば、心の中で思っていることや秘密の内容に焦点が当たる。漢字は客観的に概念だけを伝える。

(宗宮 2012: 172)

「輸入」された外来語はやがて日本語の語彙体系に導入されるが、もともと日本語に属さない事物の単独の名前、固有名としてカタカナで表記される。固有名は単に音であり概念を伴わない。「外来・音・概念の不在」という性質は、合わせて「共感の欠如」すなわち「距離感」となってカタカナに乗り移り、カタカナは書き手が何らかの理由で距離感・外れた感じを抱くものを表すのに使われている。

(宗宮 2012: 173-174)

[英語翻訳との比較]

1. 日英語対照による英語教育。

・その老齢のためだった→ The elephant age had led to --- 無生物主語。 ・町にひきとられることになった→ by its adoption by our town --- 名詞構文。 ・経営難を理由に→ financial problems caused --- 無生物主語。 ・動物たちは動物取引仲介業者の手をとおして全国の動物園にひきとられていったのだ（受動態）→ a wildlife dealer found places for the other animals in zoos throughout the country. --- 能動態に変換。 ・よぼよぼの象（擬態語）→ a feeble old thing --- 語彙化。

## 2. 翻訳研究による文体教育。

・小さな動物園→ the little private zoo --- 「私立の」が付加され、翻訳者の「小さな」に対する印象が表現されている。 ・物好きで余裕のある→ was willing to take in --- 「物好きで余裕のある」が含意する主人公の皮肉っぽい性格が、英訳では中和されている。 ・英語翻訳には原文の文字種の醸し出すニュアンスを移す工夫（活字の書体、字体、大きさなどの変更や記号の使用）はないが、滑らかな感じを出すために専らやさしい日常語彙が多く用いられている。

### ⑤英語翻訳間比較

同じ日本文学作品に複数の英語翻訳がある場合、それらを比較することで、英語翻訳間の文体の違いや、解釈の違いがよくわかる。以下に筆者がゼミの授業で行った、夏目漱石『草枕』の一節の2つの英語翻訳の比較による文体分析を一例として示す。

[夏目漱石]（日本語原文：以下 N）

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。<sup>とかく</sup>兎角に人の世は住みにくい。

（夏目漱石 1950 『草枕』新潮文庫）

[Turney]（旧訳：以下 T）

Going up a mountain track, I fell to thinking.

Approach everything rationally, and you become harsh. Pole along in the stream of emotions, and you will be swept away by the current. Give free rein to your desires, and you become uncomfortably confined. It is not a very agreeable place to live, this world of ours. (Tr. Alan Turney. 1965. *The Three-Cornered World*. London: Peter Owen)

[Mckinney]（新訳：以下 M）

As I climb the mountain path, I ponder---

If you work by reason, you grow rough-edged; if you choose to dip your oar into sentiment's stream, it will sweep you away. Demanding your own way serves to constrain

you. However you look at it, the human world is not an easy place to live.

(Tr. Meredith Mckinney. 2008. *Kusamakura*. New York: Penguin Books)

[文体分析] N の作品、文章、印象、言語、目的。

流暢な七五調のリズム（五七調は重厚なリズム）、散文だが詩文の趣、物語調であり論説調、口語体、標準的語彙、短文による構成、接続詞なし→規範的言語使用の中に逸脱的言語使用を加えて、一般的読者にも理解しやすく、軽快だが軽薄ではない文体を作っている。

[英語翻訳] 日本語原文と対照しながら、T と M の翻訳を比較。

- 山路を登りながら、こう考えた。

T : Going up a mountain track, I fell to thinking. 原文形式に忠実。

M : As I climb the mountain path, I ponder--- 原文形式に忠実。

- 智に働けば角が立つ。

T : Approach everything rationally, and you become harsh. 「角が立つ」を解釈。

M : If you work by reason, you grow rough-edged; 'grow rough-edged' は原文に忠実。

- 情に棹させば流される。

T : Pole along in the stream of emotions, and you will be swept away by the current.

原文形式に忠実。'be swept away' は原文に忠実。

M : if you choose to dip your oar into sentiment's stream, it will sweep you away.

原文形式に忠実。'sweep you away' は受容化。

- 意地を通せば窮屈だ。

T : Give free rein to your desires, and you become uncomfortably confined.

「意地を通せば」を解釈。

M : Demanding your own way serves to constrain you.

原文構造の変更。「意地を通せば」を解釈。

- 兎角<sup>とかく</sup>に人の世は住みにくい。

T : It is not a very agreeable place to live, this world of ours.

「人の世は」を後置し語順を変更。

M : However you look at it, the human world is not an easy place to live.

原文形式に忠実。「兎角」を解釈。

[印象]

- T はリズム感がありやや堅い響きを感じる。M は親しみやすい柔らかい語り口を感じる。

[言語]

- T 「命令文+and」: M 「if 節」
- T 「分詞構文」: M 「as 節」
- T 「語彙やや難」: M 「語彙やや易」

## [目的]

・TはNの流暢で簡潔な七五調のリズムに合うように「命令文+and」の形式をとり、語彙もNに合わせてやや堅い語を用いている。Mは訳文読者が受容しやすいように構文や語彙に標準的なものを使っている。Tは形式的等価に、Mは機能的等価に焦点があり、新訳だけあってスコ-pos理論に基づいた翻訳となっている。

以上、精読指導に英訳文学作品を用いることで、翻訳研究、文体論、日英対照言語学、異文化理解などの多面的な指導が可能になることを見てきた（文学作品を教材に用いることで、辞書的な意味を越えた文脈依存の意味を考える語用論的指導も当然ここに含まれる）。

## 6. 指導結果の考察

筆者が担当している1回生ゼミ(16人)と3回生ゼミ(9人)で12回(2017年4月～7月)この精読指導を実施し、①構造解析指導 ②文体調整指導 ③日英対照指導に対する感想を「10(有効)～5(普通)～0(無効)」の値で示させた。結果は①が7.1 ②と③が6.9で、「やや有効」という感想であった。筆者の指導実感では翻訳技術としての構造解析(核文と非定形節)への関心は高かったので、今後読者を意識した訳文の文体や表現の日英対照に更に関心を向けさせることで、機能的等価を目指した精読指導を十分軌道に乗せることが出来ると思われる。

①核文や非定形節による構造解析指導は英文の正確な読解に有効だと思うか。

10 / 5人, 9 / 3人, 8 / 1人, 7 / 6人, 6 / 3人, 5 / 5人, 4 / 1人, 3 / 1人 有効値7.1

②直訳の文体調整指導は原文の内容を読み手に適切かつ効果的に伝えるのに有効だと思うか。

10 / 2人, 9 / 1人, 8 / 5人, 7 / 5人, 6 / 6人, 5 / 5人, 4 / 1人, 3 / 1人 有効値6.9

③日英語対照指導は日本語と英語の類似点や相違点を意識する習慣形成に有効だと思うか。

10 / 4人, 9 / 2人, 8 / 4人, 7 / 3人, 6 / 4人, 5 / 6人, 4 / 1人, 3 / 1人 有効値6.9

## 7. おわりに

精読指導において逐語訳(行間訳)するだけの間違った文法訳読法は排斥されて然るべきであるが、では正しい文法訳読法とは如何なるものか。次の意見は傾聴に値する。

文法訳読は、母語の力を利用しつつ、英語と日本語の間を往来しながら知識を自動化し、習熟の度合いとともにだんだん日本語の介在をなくしていき、最終的には訳さなくても理解できるようになる「直読直解」を目指しているのである。[...] 習熟度が進むにつれ、日本語を介する割合を減らしていき直読直解を目指す「文法訳読法」は、英語が苦手・得

意の如何に拘わらず、日本の全ての学習者にとって有効な学習方法ではないだろうか。

(杉山 2014: 119)

図4は精読指導の学際的フレームを示したもののだが、文体論(+語用論)と翻訳研究(+日英対照言語学)が英語教育(精読指導)の両輪であることがわかる。まだ試行錯誤の段階であるが、本稿で示した文体指導や翻訳指導を組み込んだ精読指導は、英訳日本文学作品を用いることで、日本語・日本文化を意識した英語学習を可能にし、異文化理解や発信型コミュニケーションの基礎的能力養成に資する可能性があると考えている。

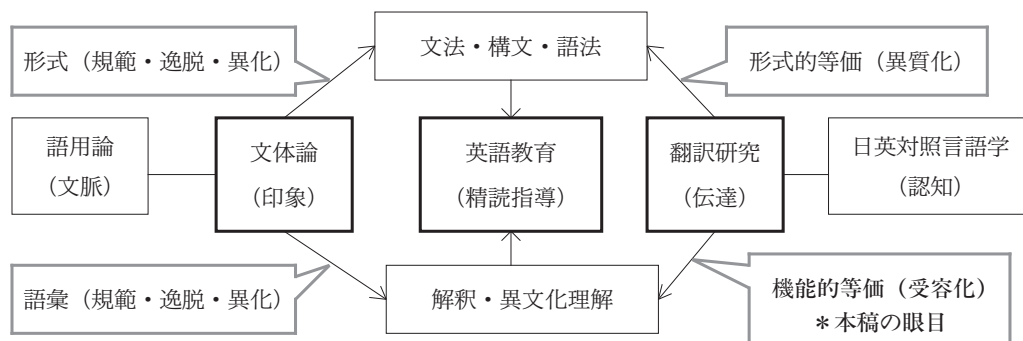


図4 精読指導の学際的フレーム

〔注〕

- (1) 日本学術会議 (2012) 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編集上の参照基準 (言語・文学分野)」。
- (2) 翻訳は創作という考えを村上は自分の作品の英語翻訳の重訳で示している。「レーダーホーゼン」の英訳で翻訳者は明らかに「こみ」をゴミと読み違えて 'garbage' と訳しているが、村上の重訳では訂正せずそのまま用いている。村上が翻訳を一種の創作と考えている証左である。(引用文中の圏点は原文のまま。)  
 [原文] 村上春樹 2004 [1985] 「レーダーホーゼン」『回転木馬のデッド・ヒート』講談社. 18-36.  
 それなのに母は何の説明らしい説明もなく父親とこみで私を捨ててしまったのよ。(27)  
 [英訳] Murakami, H. 1994. 'Lederhosen' In Haruki Murakami. *The Elephant Vanishes*. Tr. Alfred Birnbaum. New York: Vintage International. 120-129.  
 And yet here was Mother throwing me out with Father, like so much garbage, and not a word of explanation. (124)  
 [重訳] 村上春樹 2005 「レーダーホーゼン」『象の消滅』新潮社. 168-180.  
 それなのに母は何の説明らしい説明もなしに、私をお父さんと一緒に、まるで生ゴミか何かみたいに、あっさり捨ててしまった。(173)
- (3) Cf. Nida, E. A., Taber, C. R. 2003<sup>4</sup>[1969]. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Brill. 202-203.

a SENTENCE pattern which is basic to the structure of a language, and which is characterized by (a) the simplest possible form, in which OBJECT are represented by NOUNS, EVENTS by VERBS, and ABSTRACTS by ADJECTIVES, ADVERBS, or special verbs (according to the GENIUS of the language), (b) the least ambiguous expression of all RELATIONS, and (c) the EXPLICIT inclusion of

all INFORMATION. Each language has only 6-12 types of kernels. Kernels are discovered in a SURFACE STRUCTURE by BACK TRANSFORMATION: they are converted into a surface structure by TRANSFORMATION. (small capital in the original)

- (4) Jespersen, O. 1965 [1924]. *The Philosophy of Grammar*. New York: Norton & Company. は2語以上の関係を表す three ranks (1～3次語の順位)、junction (連体的結合：修飾関係)、nexus (述語的結合：主語述語関係) について論じており、非定形節は nexus に属している。しかし nexus は形式上の主語述語関係 (定形節) と意味上の主語述語関係 (非定形節、句としての所有格構文) の両方を指す用語であり、[NP XP]/NP<sub>i</sub>[PRO<sub>i</sub> XP] という定形動詞を欠いた節内での意味上の主語述語関係のみを指す用語としては不適切であるため、本稿では一貫して非定形節という用語を用いている。

Further, the relation between the last two words in *he painted the door red* is evidently parallel to that in *the door is red* and different from that in *the red door*, and the two ideas “the Doctor” and “arrive” are connected in essentially the same way in the four combinations (1) the Doctor arrived, (2) I saw that the Doctor arrived, (3) I saw the Doctor arrive, (4) I saw the Doctor’s arrival. What is common to these, [...], is what I term a nexus, [...].

(Jespersen 1965: 115. italics in the original)

- (5) 非定形節は RAISING[上昇/ECM (Exceptional Case Marking: 例外的格付与)]構文または CONTROL[制御]構文の構造 ([NP XP]は RAISING 構文、NP<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> XP]は CONTROL 構文) を持つ。SVO[NFC]でVが強い他動性 (transitivity) を持つ時[NFC]はVの結果を含蓄する。また SVO[NFC]の結果構文では主節 (main clause) と NFC の間に因果関係があるが、様態構文には因果関係はない。以下は NFC 学習用の配布資料である。

NFC : [NP XP] /NP<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> XP] as Nominal Clause (NC), Adjectival Clause (AdjC), Adverbial Clause (AdvC)

### 1. to 不定詞節

I want [you to study English]. 私は[君が英語を勉強する]ことを望む。NC

I prefer [(for) you to come here]. 私は[君がここに来る]ことのほうを望む。NC

I waited for [his anger to calm down]. 私は[彼の怒りが鎮まる]ことを待つ。NC

I got [him to study English]. 私は[彼が英語を勉強する]ことを(説得して)させた。NC

I proved [him to be guilty]. 私は[彼が有罪である]ことを証明した。NC

I advise [him to start early]. → I advise [that he should start early]. 私は[彼が早く始める]ことを勧める。NC

I want something [PRO<sub>i</sub> to drink]. → something [that I drink]. 私は[(私が) 飲む]ものが欲しい。AdjC

I persuaded him<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> to do it]. → [that he should do it]. 私は彼を説得し[(彼が) それをする]ようにした。AdvC

### 2. 原形不定詞節

I made [him go there]. 私は[彼がそこに行く]ことを(強制的に)させた。NC

I let [him go there]. 私は[彼が彼らを助ける]ことを(許可して)させた。NC

I had [him help them]. 私は[彼が彼らを助ける]ことを(当然の如く)させた。NC

I saw [a bird fly in the sky]. 私は[鳥が空を飛ぶ]一部始終を見た。NC

Let [there be peace on earth]. どうか[地上に平和がある]ように祈る。NC

I helped her<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> do it]. → [so that she could do it]. 私は[彼女がそれをする]ように彼女を手伝った。AdvC

### 3. 現在分詞節

I have [him studying English]. 私は[彼が英語を勉強している]ことを(当然の如く)させる。NC



He got [the machine running]. 彼は[機械が動いている]ように(努力して)した。NC  
 I saw [a bird flying in the sky]. 私は[鳥が空を飛んでいる]ところだけを見た。NC  
 I closed our shop with [night coming on]. 私は[夜がやって来ている]状態で閉店した。NC  
 [PRO<sub>i</sub> Walking along the street], I<sub>i</sub> met him. [(私が) 通りを歩いている]時に、私は彼に会った。AdvC

#### 4. 過去分詞節

I had [my wallet stolen]. 私は[財布が盗まれる(迷惑・被害)]ということをされた。NC  
 I heard [the song sung]. 私は[その歌が歌われる]のを聞いた。NC  
 He sat with [his eyes closed]. 彼は[目が閉じられている]状態で座っていた。NC  
 [PRO<sub>i</sub> Seen from behind], they<sub>i</sub> look the same. [(彼らが) 後ろから見られる]と、彼らは同じに見える。AdvC

#### 5. 動名詞節

I want [you seeing him again]. 私は[君が再び彼に会うであろう]ことを望む。NC  
 It is sad to think of [you getting nothing]. 私は[君が何も得られない]ことを考えると悲しい。NC  
 I can't prevent him<sub>i</sub> from [PRO<sub>i</sub> going]. 私は[彼が行くこと]から彼を止められない。NC  
 I<sub>i</sub> spent the morning (in) [PRO<sub>i</sub> sitting in a traffic jam]. 私は[(私が) 交通渋滞の中で座って]午前を過ごした。NC  
 On [PRO<sub>i</sub> hearing this], I<sub>i</sub> changed my plans. [(私が) この事を聞く]と同時に、私は計画を変更した。NC  
 He advised [PRO<sub>i</sub> betting] if I<sub>i</sub> wanted it. 彼は私がそれを欲しいなら、[(私が) 賭博をする]ことを勧めた。NC

#### 6. 無動詞節 (小節)

I think [him honest]. 私は[彼が正直だ]と思う。NC  
 I want [you sober]. 私は[君が真面目である]ことを望む。NC  
 He made [me happy]. 彼は[私が幸せである]ことをさせた。NC  
 I consider [him a dope]. 私は[彼がまぬけだ]ということを思っている。NC  
 They made [him president]. 彼らは[彼が社長である]ようにした。NC  
 They let [me in]. 彼らは[私が中に入る]ことを(許可して)させた。NC  
 He let [the air out of the tires]. 彼は[空気がタイヤから抜ける]ようにさせた。NC  
 He spoke with [his mouth full]. 彼は[口の中が一杯である]状態で話した。NC  
 They came in with [their hats on]. 彼らは[帽子が被られている]状態で入ってきた。NC  
 He sat with [a pen in his mouth]. 彼は[ペンが口にある]状態で座っていた。NC  
 I advised [him against the plan]. 私は[彼がその計画に賛成しない]ことを勧めた。NC  
 He appointed me<sub>i</sub> (as) [PRO<sub>i</sub> chief]. 彼は私を[(私が) 主任だ] (と) 任命した。NC  
 I persuaded him<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> in]. → [that he (should) be in]. 私は彼を説得して[(彼を) 中に入れた]。AdvC  
 I wiped the desk<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> clean]. → [so that it became clean]. 私は机を拭き[(机は) きれいになった]。(結果構文) AdvC  
 He<sub>i</sub> ate the fish [PRO<sub>i</sub> nude]. → [though/when he was nude]. 彼は裸で魚を食べた。(様態構文) AdvC  
 He ate the fish<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> raw]. → [though/when the fish was raw]. 彼は生で魚を食べた。(様態構文) AdvC

- (6) 本稿の「文体調整」は、斎藤兆史・2017。「創作英作文—理論と実践」『英語のスタイル』豊田昌倫、堀正広、今林修(編著)。研究社。261-275。が提唱する、意図や意匠の適切な表現の方向性を指示する規範主義 (prescriptivism) による「創作文体論」(creative stylistics) の日本語

版に相当し、その12のチェック項目（1 意図、2 メッセージ、テーマ、モチーフ、3 テキストの種類、4 状況・人物設定、5 物語の構成と視点、6 時制、相、時間の移動、7 統語的選択、8 語彙的選択、9 音韻的選択、10 書記論的選択、11 隠喩と象徴、12 結束性・一貫性・整合性）の内、1, 7, 8, 9, 10, 12の項目に係る。

- (7) Cf. 「正式には松本春綱先生であるが、センセイ、とわたしは呼ぶ。「先生」でもなく、「せんせい」でもなく、カタカナで「センセイ」だ。」(川上弘美 2004 『センセイの鞆』文春文庫. 9.) この英訳は、“HIS FULL NAME was Mr Harutsuna Matsumoto, but I called him ‘Sensei’. Not ‘Mr’ or ‘Sir’, just ‘Sensei’.” (Tr. Allison M. Powell. 2013. *The Strange Weather in Tokyo*. London: Portobello Books. 1.) となっており、ローマ字が日本語のカタカナに相当する。

#### 〔引用文献〕

- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』開拓社.  
ウイドウソン, H. G. 1989. 『文体論から文学へ—英語教育の方法—』田中英史, 田口孝夫 (訳). 彩流社.  
斎藤兆史. 1996. 「テキストと文体」『文学の方法』川本皓嗣, 小林康夫 (編). 東京大学出版会. 53-71.  
杉山幸子. 2014. 「文法訳読は本当に「使えないのか」?」『日本英語英文学会』23. 105-128.  
宗宮喜代子. 2012. 『文化の観点から見た文法の日英対照』ひつじ書房.  
谷 光生. 2015. 「中学校英語教科書における to 不定詞の扱い—その不備と今後の改善について—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』1. 123-130.  
鳥飼玖美子, 河原清志. 2013. 「外国語教育への応用①: 文法訳読と翻訳」『よくわかる翻訳通訳学』鳥飼玖美子 (編著). ミネルヴァ書房. 102-103.  
ナイダ, E. A., ティバー, C. R., プラネン, N. S. 1973. 『翻訳—理論と実際』澤登春仁, 升川潔 (訳). 研究社.  
中村 捷. 2009. 『実例解説英文法』開拓社.  
プラネン, N. S., 澤登春仁. 1988. 『機能的翻訳のすすめ』パレル・プレス.  
Aarts, B. 1992. *Small Clauses in English*. Berlin: Mouton de Gruyter.  
—. 2013<sup>4</sup>. *English Syntax and Argumentation*. London: Palgrave.  
Brannen, N. S. 1997. *Translation: where Cultures Meet—Translating J ↔ E*. Los Angeles: J-E Link.  
Jacobson, R. 1960. ‘Linguistics and Poetics.’ In Thomas A. Sebeok. (Ed.). *Style in Language*. Cambridge: MIT.  
Munday, J. 2001. *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. London: Routledge.  
Reynolds, M. 2016. *Translation: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press.  
Sato, M. 2013. *Self-Back-Translation of Lederhosen by Haruki Murakami: A New Possibility of Literary Translation*. CULTURE AND LANGUAGE (SupporoUniversity). 78. 13-27.

#### 〔使用テキスト〕

- 夏目漱石. 1950. 『草枕』新潮文庫.  
(Tr. Alan Turney. 1965. *The Three-Cornered World*. London: Peter Owen)  
(Tr. Meredith Mckinney. 2008. *Kusamakura*. New York: Penguin Boks)  
村上春樹. 2005. 「象の消滅」『象の消滅』新潮社. 404-426.  
(Tr. Jay Rubin 1994. ‘The Elephant Vanishes.’ In Haruki Murakami. *The Elephant Vanishes*. Tr. Alfred Birnbaum and Jay Rubin. New York: Vintage International. 307-327.)

(きったか しんいちろう 英米学科)

2017年10月2日受理